

新たな子育て文化の支援へ

「子育て支援」の必要性

「子育て支援」という言葉が使われるようになったのは、25年程前の『厚生白書』からだと言われている。ちょうどこの年は、ひとりの女性が生涯に子どもを産む数を示す特殊合計出生率が、過去最低の1.57となり、「1.57ショック」と呼ばれる、深刻な少子化問題の始まりの年でもある。それ以降、日本では「子育て支援」の必要性が叫ばれ続けてきた。ではなぜ、子育てに地域力を求める「地域で子育て」が重要視されているのであろうか。

子育て困難社会の到来

「地域で子育て」は、ひと昔前までは当たり前で営まれてきたものであった。1960年代は核家族化が進み始めていたものの、3世代同居もまだ多く、祖父母が子どもの世話をサポートし、近所同士の助け合いの中で子育ては行われていた。近所の子ども同士で日が暮れるまで遊び、上の子が下の子の面倒をみる姿も日常の光景の一つであった。

しかし、核家族化が定着し、夫婦だけでの子育てが主流となり、子育ての知恵を親世代から受け継ぐ機会が失われ

てきた。また、今の子育て世代は、自分が母親になるまでに乳幼児の世話をした経験のない人が多い。そのため、育児経験がほぼゼロの状態から子どもを育てなければならぬ不安を抱えながら、子育てをしている母親が非常に増えている。

さらに、女性の多様な生き方が出来る現在、「子どもを産み育て、良い母親になる」という価値観に疑問を持つこともなく、子育てに無我夢中で過ごしてきたひと昔前の女性の生き方とは、相容れない考えを持つ女性も増えている。子育てが自分の時間や行動を制約するもの、また自己犠牲と感ずる人も増え、子育てをストレスと感ずる人もいる。

加えて、「女性は生まれながらに母性が備わっており、子どもを産めば自然と母性が湧いてくる」といった「母性神話」や、「3歳までは母親が子育てに専念すべきだ」といった「3歳神話」が社会通念として今でも根強く残っていることが、子育ての理想についていくことが出来ない母親達をより苦しめている。

また2000年代に入り、雇用環境の変化に伴い、正規雇用者よりも年収の少ない非正規雇用者の割合が高くなり、子育て世代の収入も減少している。一方、高学歴化が定着しつつある中

で「子どもを大学まで進学させなければ」といった親としての義務感が、経済的負担として子育て世代に大きな負担となっている。さらに、女性が経済的役割を担う意味で、子育てしながら働きつづける母親が増えている。仕事と子育ての両立を夫婦だけで担うにも限界があり、両立を継続するためにならぬかの支援が必要とされる。

真の「子育ての社会化」を目指して

このように、子育てをめぐる社会環境や価値観がこの50年で大きく変化した。そのため、母親の子育て負担が「子育ての孤立化」へと向かわないためにも、地域の支え合いが、より一層必要とされてきている。

政府の子育て支援施策についても、この20年で変化をしている。「1.57ショック」後の本格的な子育て支援として、1994年に「エンゼルプラン」が打ち出された。具体的な支援内容は保育所サービスの機能強化で、少子化対策というよりは、女性の就労を支援するといった側面が強いものであった。しかし、2000年代に入り、それまでの保育政策から働き方そのものを見直す「ワー

ク・ライフ・バランス」の視点や、地域の子育て支援、若者の就労支援などを組み込み、子どもを産み育てやすい社会を構築する政策に転換してきた。さらに2015年にスタートする「新子ども・子育て支援制度」では、すべての子育て家庭を支援すべく、地域の子育て支援の充実化を図る内容である。

子育てを家族の責任とするのではなく、社会全体として子育てを支援する「子育ての社会化」という言葉が生まれてから10年になる。子育てしやすい居場所づくり環境づくりを地域で考え、整える時代になってきている。子育てを地域全体で楽しめる社会こそが、今求められる真の「子育ての社会化」と言えるのではないだろうか。

（参考文献）

- 厚生労働省
『平成25年度厚生労働白書』（2013年）
- 汐見稔幸編集代表
『子育て支援の潮流と課題』（2008年）
- 原田正文著
『子育ての変貌と次世代育成支援』（2006年）
- 大日向正義著
『みんなママのせい？子育てが苦しくなったら読む本』（2014年）

地域の子育てが笑顔で いっぱいになりますように

子育て応援サークル「いちご」 地域に密着した親と子の居場所づくり

サークルの名前は、人と人との出会い、絆づくりを大切にしたい。一期一会のいちごからとった。誰からも愛される可愛い、イチゴのように「いちご」が根を張り、実をつけ地域に密着した親子の居場所、人と人との絆づくりの手伝いができるようにと、活動する。

現在、メンバーは、200人を超える。はじめたきっかけは7年前、代表者の藤井さやかさんが第二子を出産の後、育児に悩み、産院の子育てサロンに参加したことであった。

「育児の悩みや不安を話すことで気持ちがいへん軽くなり、仲間と共感しながら集える場所があったらいいな」と思いました。当時、同じようにはじめての出産を経験した小学校からの同級生の山口さんと「いちご」を立ち上げました」

県東部（沼津市・清水町・三島市・

長泉町）を中心に子育て中の「あたらしいな」に定める活動を、月6〜7回行う。親子体操・リトミック、季節の行事、自然体験、異世代交流、育児・食育講座等のイベントを中心に開催。子育て中の親子が心も体も健康でいられるように、気軽に集える「学び・遊び・体験」の場を提供する。

地域（人）とのつながりを大切に

人と人とのつながりを大切に、地道に7年間活動を重ねた実績が、実を結び始めている。その一例が地域の人々とのコラボ企画。

「地元の食材を子どもたちに伝える食育プロジェクトとして、生産者さんにご協力をいただき、地元食材の本物の味に触れる体験を実施しました。また、商店街活性化のために、子育て世代を商店街



リトミック



山口さん 藤井さん

子育て応援サークル いちご

代表：藤井さやか

TEL:090-1620-6337

E-mail:ichigostaff@yahoo.co.jp

に呼び込むイベントを沼津市の3つの商店街とのコラボで、実施しました。これからも定期的に開催していく予定です」

「色々なイベントを通して、人と人とのつながりができました。「いちご」を知った人たちから、一緒に何かできないかと声をかけていただけるとも増えてきました。これからも地域との関わり、人との出会いを大切に、誠意を持った活動を続けていきたいと思えます」

今後の課題は、いろいろな世代と関わりを作ること。特に高齢者との関係作りが、きちんとできる仕組みを作り上げること。

これからも今の活動を継続していく

子どもが小学校に入ると忙しくなり、集まる機会が少なくなる。そこで、これまで築き上げた人間関係を長く継続できたらいいなと、幼稚園や小学生を対象とした活動を月1回提供する。

また、父親参加型のイベントも年に数回企画する。イベントは毎回好評で、父親も積極的に参加してくれる。

「これからも初心を忘れず、自分たちの経験を生かし、ママたちが心も体も元気になる。あつたらいいな。出会えてよかった。の居場所づくりを心がけていきたいです。また、たくさんの方に「いちご」を知っていただくことで、お互いにとって素敵な関わりができたらいいなと思っています」と話す、藤井さんの生き生きとした表情がとても印象的であった。

NP(ノーバディーズパーフェクト)プログラムの流れ

ファシリテーターが進行役

- ①1週間の気持ちをおしゃべりしたり、ゲームをして緊張をほぐす。
 - ②講座内のルールを確認します。
 - ・携帯はマナーモード
 - ・ここで話をしたことは口外しない
 - ・話をしたくないことはパスしてOK!
 - ③今回話し合うテーマについて話し合う。

例えば

 - ・食について
 - ・しつけについて
 - ・家事について
 - ・時間の使い方
 - ・子育て周りの人間関係
 - など

→1回につき1つのテーマを話し合う。

～ティータイムをはさむ～
 - ④話し合ったテーマについてNPプログラムのテキストを読む。
 - ⑤感想を伝え合い、「また会いましょう!」
- ※この流れで週1連続6回の会を重ねる。



「子育て支援」は、子どもが健やかに育つための支援だけではない。育てる親が子育ては楽しい!と思えるよう、親力を高め、子育てに自信を持つための親への支援でもある。具体的な方法で親への支援に取り組む NPO 法人 place of peace の活動を紹介します。

親に寄り添う子育て支援を
NPO 法人 place of peace

『完璧な親なんていない!』を伝えるプログラム

「Place of Peace」の主な活動の一つに、カナダで生まれた親支援プログラム「ノーバディーズパーフェクト」(以下NPプログラム)がある。『完璧な親なんていない!』のメッセージのもと、日ごろ感じる子育ての悩みや関心について、参加グループの中で話を聞き合い、それぞれの価値観を認めながら親としての自信をつけていくことを目的とする。NPプログラムの特徴は、参加者が中心なこと。子育ての悩みを抱えた親同士がリラックスした雰囲気の中で語り合うことで、本音が出たり、子育てしているからこそ出るリアルな悩みを共有し、自然と参加者同士に仲間意識が生まれてくる。NPプログラムを影で支えるのはファシリテーターの存在。「Place of Peace」

の田中知子さんと宮本久代さんが、認定ファシリテーターとして連続した講座を受け持ち、時に場を和ませたり参加者同士をそっと結びつける。

NPプログラムの学びの中で大事なことは、体験で学んだことを別の場面で応用できる力をつける「体験学習サイクル」。講座が終わり、自分に何かトラブルが起きてても、「それなら次はこうしてみよう」と、自分の思考を整理しながら、進めることが出来る。「この考え方は子育てだけでなく、仕事や夫との関係などにも活用できますよ」と宮本さん。「多様な価値観を認め合うことも大事にするので、聞く耳を持てるようになります。私達自身もNPプログラムで学ぶことが本当に多いです」と田中さん。

講座終了後、互いに連絡を取り合いその後も参加者同士の交流が続く、参加者が別の子育て支援活動を始めるなど、NPプログラムは様々な効果を生み出している。

同じ親として手を差し伸べたい

「子育ては素晴らしいということをお母さん自身に気付いてもらいたい。完璧じゃなくてもいいんだよ。何か特別なことをしなくても、お子さんと一緒にいることが幸せだと感じて欲しい」。活動を続ける宮本さんは願う。「世間的には、子育ては親になれば自然に出来るものだという風潮が、まだまだあります。子育てでも皆で支える包括支援社会になって欲しいです」。親支援がより今の社会に求められていると感じ、田中さんは現在



NPO法人 place of peace
田中知子さん(左)と宮本久代さん

NPO法人place of peace
<http://www.pop-s.org/>
info@pop-s.org

の活動へ行きついた。
「元氣なお母さんを支援するよりも、出てこれない孤独なお母さんをどうやって引っ張り出せるか。NPプログラムがその受け皿になれば」と、子育てに悩み苦しむ親に支援の手が届く必要性を説く。

誰でもできる子育て支援とは?

「誰でもできる子育て支援は、街でお子さんやお母さんに『かわいいね』『大変ね』と、知らない人でも気軽に声を掛け合うこと。その一言で救われるお母さんはきっと多いはず。もしかしたら私たちが出来る一番大きな子育て支援なのかもしれません」



大人は未来につなぐ夢を持とう

ある時、家庭教師をしていた子どもに「ところで先生は将来何になりたい？」と聞かれハッとした。自分の将来はもう決まっ
てしまい、変えることは出来ないと思い込んでいた。思わぬ問
いかけに未来を描く楽しさを思い出し、語り合った。大人こそ
夢を見たい、大人こそ希望を持ちたい。それこそが、地域や子
どもたちの未来につながる。



人と人が つながる喜びを味わおう

3.11 東日本大震災以降、人と人の絆の大切さ
が話題にのぼらない日はなかった。あれから3年半、
そのトーンがだいぶ下がったと感じるのは、私だけだ
ろうか。災害の多かった今年の夏、広島安佐南区
の八木地区に集まったボランティアや援助品の数は、
「絆」が日本にしっかりと根付いたことを示した。でも
「絆」を災害の後、再確認するのは、あまりにも寂しい。

人は苦しい時、人の温かさや優しさで再び立ち上
ることができる。人は嬉しい時、一緒に喜びを分か
ち合いたいと願う。常日頃から、SNS だけで絆を確
かめ合うのではなく、人と人が出会って、友情の絆
をつなげてゆこう！

一人ひとりの
“つなぐ”
みんなで

“つながる”から、
“つなげよう”の
輪にひろげよう

取材を終えた
編集員からの
つぶやき



ハートフルな世の中になるには

「孤独感」は誰の心にもある感情。それがあからこそ人はつながり
を求める。けれども実際に強い孤独を抱えている人は声を上げることす
ら出来ないのでは。私たちがそこに気づき、気持ちにそっと寄り添い合
える心の余裕を持てたら、もっとハートフルな世の中になれる。まずは身
近な人にいつもより明るい声で挨拶から始めてみませんか。

高齢者こそつながりの輪の中に



地域福祉の「輪」の中で、自分が出来ることを探したり助けて
ほしいことを伝えてみよう。その「輪」の中に一歩が踏み出せれ
ば孤独死や生活への不安も少なくなっていく気がしませんか？
人とつながっていることが安心となり、生きがいにもなります。高
齢者こそつながりを持ち続けることが大切で、多くの人にそうあっ
てほしいと願います。



あざれあ図書室から
おすすめの本を紹介します!



『おたがいさま』(森まゆみ ポプラ社 2011年)

続きを読もうと本を開いたら、何だかほっとするような幸せな気持ちになり、読み終わる頃には、どうしたら自分の住む地域が良くなるか、考え始めていた。

著者・森まゆみさんは、1984年に仲間とともに地域雑誌『谷中・根津・千駄木』を創刊し、2009年の終刊まで編集を務めた人だ。生まれは1954年東京の下町で、両親は仕事が忙しく、学校から帰ってくると、隣の家で宿題をしたり、反対に隣の家の子がご飯を食べにきたりしながら育ったという。「おたがいさま」は、そんな助け合いのなか、してあげる方が相手の気持ちを軽くするために言っていた言葉だそう。

この本では、助け合いの気持ち「おたがいさま」を大切にしてきた森さんの暮らし方、日本や海外の魅力的な地域と人たち、地域の子育てや介護、雇用など、これまで地域のひとと生き、考えてきたことを余すところなく語っている。「不参加の権利」「一人である権利」も大事にしながら「温かくて風通しのいい町づくり」を目指してきた彼女の言葉はすっと入ってくる。

利用案内

貸出: 図書5冊、ビデオ・DVD2本(2週間)
開室時間: 平日9:00~18:00、土日祝9:00~17:00
休室日: 第1・3・5日曜日、図書整理日
TEL: 054-255-8763 FAX: 054-255-8759

富国育徳の理想郷—しずおか



Shizuoka Prefecture

ねっとわあく

2014/10/31 Vol.64

『ねっとわあく』は年2回(3月、10月)発行します。県民生活センター、県内の男女共同参画センター、市町役場、公民館などの公共施設で配布しています。会社やご友人にも是非回覧してください。

発行日/平成26年10月31日
企画・編集・発行/あざれあ交流会議グループ
〒422-8063 静岡市駿河区馬淵1丁目17-1
TEL/054-250-8147 FAX/054-251-5085

編集長/齋藤典子
編集員/國井良子、黒田麻紀子、園部真由美、松永多佳夫
表紙クラフト/園部真由美
印刷/星光社印刷株式会社

編集後記



写真 前列左から 松永多佳夫 齋藤典子
後列左から 黒田麻紀子 國井良子 園部真由美

●最近の日本は、他者への無関心を通り越し、最低限のマナーを守る行為が見られなくなった。先日も込み合う地下鉄車内の中で不意に70代男性が「この足が邪魔なんだ」と声を上げ、同時にステッキで足を叩かれた。確かに私の大根足は彼にとって邪魔だったかもしれない。が、あまりの痛さで、ギスギスした人の感情に思わず涙が出た。

(編集長 齋藤典子)

●今号編集集中、家族が突然入院。人とのつながりや家族の絆を再確認する機会になりました。一緒に泣いたり笑ったり、多くの人に支えられていると実感したり。「つながり」も「絆」も自分と他の誰かとの間に生まれるもの。「独り」では感じる事ができないものなんですね。(國井良子)

●今号は初めて取材を経験し、「一期一会」の良さを改めて実感しました。想いを文字化し形にする難しさを感じながら、今回のテーマが世知辛い世の中を少しでも明るく出来たら…。と願うばかりです。(黒田麻紀子)

●「大切なものは、目に見えない」学生時代、辞書を片手に読んだサン・テグジュペリ「星の王子様」の一節です。様々なつながりも見えないからこそ「実感」として築きたい。時代・場所に関わらず、人生を通して心に添えておきたいメッセージです。(園部真由美)

●仕事を辞めてからはや3年半。今は料理に、孫育てに、忙しい毎日である。料理は自分が食べたいものを作る、孫育ては勉強を見る、ことから始めた。元気なうちは続けようと思っている。(松永多佳夫)